



特集

多摩ニュータウン No.692遺跡



空からみた蓮生寺とNo.692遺跡

「はず」の生れる寺、すなわち、仏様の誕生する寺となり、寺名として最高の名が冠されている。

丘陵の中にも数々の寺があるが、吾妻鏡に記載されている蓮生寺が、この寺ではないかといわれていたが今回の発掘成果から、ほぼ間違いのないであろうとの結論を得た。

当地は、多摩丘陵の中でも水の豊富なところで、谷地形としてもこじんまりとまとまり、別所の地名がそれを物語り、本寺に対する庵としての集落が形成されていたわけである。

長池の存在、今は濁ってしまっているが寺の階の前の池には、トウキョウサンショウウオが棲み、葦菜もあつたと聞いている。寺前は「花立て」と呼ばれていて、村人が境内に入るのを遠慮し、外から仏様に生花を献じ遙拝していたと、壇家の老婆から聞いたところである。

(石井)

別所の谷と蓮生寺

第7回遺跡見学会

毎年恒例の東京都埋蔵文化財センター遺跡見学会が八月二日(土)、八王子市別所のNo.692遺跡で開かれ、約三百五十人の見学者がありました。当日は、隣接する八王子市の古刹、蓮生寺も一般公開されました。



説明する調査研究員

第3回安全の日

七月一日、第3回安全の日の行事が催されました。今年は、当センター関連従業員から安全標語の募集を行い、四三一句の応募の中から次の六句の標語が選ばれ入選者には記念品が贈られました。(敬称略)

全国埋文協第7回総会・研修会

全国埋蔵文化財法人連絡協議会の第七回総会が六月二十六日大津市において、三十四団体の役員員の参加により行われました。会長などの挨拶に続いて文化庁記念物課の河原純之主任調査官の講演等があり、昭和六一年度事業計画、収支予算などが決まりました。なお、当日、役員の改選が行われ、会長に東京都埋蔵文化財センター理事長水上忠、副会長に大阪文化財センター理事長坪井清足の両氏がそれぞれ選ばれました。

トビックス

五月二十四日 文化庁記念物課岡本東三調査官をお招きし、調査課研修のための講演が行われました。

七月二十一日 東京都埋蔵文化財センター昭和61年度安全推進委員会が新委員4名を加え発足しました。

八月十一日 センター及びNo.107遺跡で東京12チャンネルの取材があり、八月二十二日に「東京レポート」地下三尺は縄文?弥生?でテレビ放映されました。

遺跡庭園

11月に完成予定の都立遺跡庭園は「縄文の村」と名前も決まりました。今は着々と約50種類の木々の植樹と復原住居の設営も始まっています。

次号では、遺跡庭園の特集号を予定しています。

◇出版物の御案内

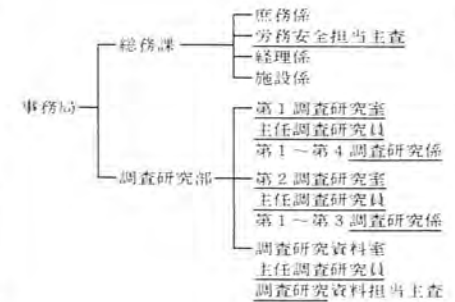
東京都埋蔵文化財センターでは、新たに次の出版物が刊行となりました。詳細につきましては、センター調査課までお問い合わせ下さい。

1、「研究論集Ⅳ」頒価六百元 送料二百円

2、「多摩ニュータウン遺跡」昭和59年度」頒価3,600円 送料千二百円

組織の一部改正

十月一日から事務局組織及び職名の一部(「調査員」から「調査研究員」)が改正されました。



発行

財団法人 東京都埋蔵文化財センター

〒206 東京都多摩市落合 1-14-2

☎ 0423-73-5296

0423-74-8044

昭和61年10月1日



空からのNo.692遺跡

が造った構造物の痕跡や使ったもの(がまとまっていたことより、8月2日に現地説明会を開いております。ここではこの時に見ていたいたものを中心に述べることにします。

写真1は、空から眺めた遺跡の一部です。幅約50mの段切(平坦な場所を造るため斜面をカットしたもの)の南に、掘立柱建物跡3棟以上・井戸跡・排水溝跡・炉跡・鍛冶跡・墓跡・地下式横穴・土坑などが検出されています。

掘立柱建物跡は、地面に穴を掘って柱を埋め上屋をつくるもので、柱間の数によってその規模を表わします。1号建物跡は2×6間の4面に廊がつく構造で、横長の大規模建物跡です。井



また墓跡には、一体分の人骨が足を折りまげ、横向き状態で検出され、嘉定通宝をはじめとする6枚の北宋銭が出土しています(写真2)。この他にも、馬の骨(歯)が出土した土坑が2基検出されています(写真3)。



2号土坑(馬面)

一方、当時の生活用具の遺物は、日常の雑器として使われた国産の陶器(甕・壺・こね鉢・皿など)やカワラケ(素焼の小皿)と共に、中国(当時は宋)製の陶磁器の出土が目だっています。



出土したカワラケ

ところで、遺跡のすぐ上にある蓮生寺は、鎌倉時代の史書『吾妻鏡』の中に平安時代末期、円浄房という僧によって創建されたことが記されています。しかし、その位置については武蔵国

とあるだけで詳しく述べられていません。これまで、現在の蓮生寺に平安時代末期に作られた仏像が2体(一部の指定文化財)あることや、他に蓮生寺と名のる寺院がないことから、『吾妻鏡』記載の蓮生寺が当寺のことと考えられてきました。

本遺跡の調査によって検出した遺構・遺物は、この史書の年代と一致しており、遺構の規模が大きいことや、中国製陶磁器の出土からみても、今の蓮生寺が史書のそれに相当することをより確かなものとし、さらにこれらが、創建時の蓮生寺に関連したものであることを推定させます。

遺跡はまだこれより一段下った低地を調査中です。ここでも鎌倉時代の建物跡や井戸跡・炉跡などが検出されています。今後の調査によって多摩の中世の様相がまた、新しくひもとかれてゆくことと思われれます。(斉藤)

文化財講座く7 遺跡群のうづりかわり

多摩ニュータウン遺跡群の密集ぶりについては、すでにこの講座の(1)で述べたが、今回はこれらの遺跡群のうち、縄文時代の遺跡について、そのうづりかわりの様子を見てみることにしよう。

ここに掲げたグラフは、多摩ニュータウン地域内から発見されている縄文時代の遺跡約60カ所を、時期別にまとめて、その数の増減を棒グラフにして表したものである。これによると、遺跡数の増減する様子から、この地域の縄文時代にいくつかの画期のあったことがわかる。すなわち、前期後半から中期前半にかけての動きと、中期後半から後期前半にかけての動きである。とここで、このような遺跡数の増減は何を意味する



このグラフは、多摩ニュータウン地域内から発見されている縄文時代の遺跡約60カ所を、時期別にまとめて、その数の増減を棒グラフにして表したものである。これによると、遺跡数の増減する様子から、この地域の縄文時代にいくつかの画期のあったことがわかる。すなわち、前期後半から中期前半にかけての動きと、中期後半から後期前半にかけての動きである。とここで、このような遺跡数の増減は何を意味する

のであろうか。遺跡の内容を検討すると、必ずしも人口の増減という人の動きにはつながらないのである。まず、草創期から前期後半にかけての遺跡の動きをみてみると、この間、およそ五・六千年の期間になるが、遺跡は大幅に増加したにもかかわらず、住居跡は前期後半を中心に、早期

の縄文遺跡にみられる最大の動きであるが、これも人口の増減に結び付けて考えるよりは、食糧の獲得方法が変化するなど、生活様式の変更に伴って遺跡の在り方が変わったと考える方が妥当性があろう。中期は遺跡数が減少したにもかかわらず、集落は大型化し、人口はむしろ増加したとみられるからである。

後期前半になると、大規模な集落は姿を消し、遺跡数も極端に少なくなる。これは明らかに人口の減少によるもので、以後、遺跡はわずかに残されるものの、この地に人の住んだ形跡はなくなる。このようにして、この地域の縄文時代は終りを迎えるが、おおよそ一万年という時間の流れの中で考えると、遺跡数が多い割には人口は少なく、また、グラフに現れた遺跡の増減も、その内容は一様ではなかったようである。(可児)

多摩の歴史を訪ねて⑦ 蓮生寺

別所の谷の奥、うっそうたる静けさの中に長い階段が続き、その上に蓮生寺がある。深山幽谷なるたたずまいを残すこの寺の幾重にもなる時の流れは、来る人もなく静寂の中に息づいている。

去ること八百有余年、源氏が帰依する円浄房なる僧、平治の乱のち「洛陽(京都)を出で武蔵国に來たり一寺を草創する」と東鑑

は記す。それゆえに都の雅をここに伝える半眼の御仏は、遠く平安の世から衆生を見つめてきた。今に至りて、風光明媚なる別所の谷も、往く風の吹くがままに、荒れたるさまは、衆生多しといえどもはかなき姿を地にさらす。常世が御仏の眼に映るがごとく、変りゆくこと必定なれども、あえていにしへの春に想いをはつることは人の情の道理上、意味なきこととは思われぬ。

武蔵名所図繪より



武蔵名所図繪より